

電線新聞

グループ業績の32%を占める

古河電工産業電線 平塚工場

新製品の燃線工程で

生産性を30%向上



江川清昭 工場長

古河電工産業電線・平塚工場(神奈川県平塚市)では、繁忙状態が続

古河電工産業電線・平塚工場(神奈川県平塚市)では、繁忙状態が続く。工場内でひとときわくわくしたのが、低圧分岐付ケーブル「超軽量ハイブ

同社生産本部の江川清昭平塚工場長によると、「平塚工場では、このケーブルを分岐加工、絶縁モールド加工を終えた状態を出荷する。ケーブルを製造する際、銅とアル



電線メーカー 工場訪問レビュー

上高の32・1%、年間出荷銅量の26%を占める。平塚工場の特長は汎用線と機能線を生産する点にある。

古河電工産業電線・平塚工場(神奈川県平塚市)の特長は汎用線と機能線を生産する点にある。同工場の売上高は、16年度93億円(前年度比3・1%減)で、同社全体の売上高の32・1%を占める。製品別の17年度上期売上高比率は、汎用線35%、機能線が65%。同工場では機能線への生産シフトが進んでおり、15年度対比で機能線の割合が12ポイント増加した。生産性の改善にも取り組み、生産性は15年度対比で17年度上期7ポイント増で着実に実績を上げる。

期7ポイント増で着実に実績を上げる。生産性の向上に大きく貢献したのは、全社を挙げて取り組む改善活動だ。この活動では、国内の各工場内でチームの生産性向上の活動内容を発表し、工場の代表を決める。各工場から選ばれた6チーム(平塚工場2チーム、九州工場2チーム、栃木工場1チーム、北陸工場1チーム)が

同社は国内に生産拠点を4工場構え、機能線に特化した九州工場(福岡県北九州市)と汎用線を担当する北陸工場(石川県羽咋市)や栃木工場(栃木県矢板市)がある。平塚工場は古河電工平塚事業所の敷地内に立地し、敷地面積は7万㎡、建屋面積は4万8千㎡。電線・ケーブルの月産能力は1千トン。工場内には、生産部門の他、技術部門、品質保証部門、設備部門などの全社組織の人員も在籍する。製品別の17年度上期売上高比率は、汎用線35%、機能線が65%。同工場では機能線への生産シフトが進んでおり、15年度対比で機能線の割合が

汎用線は古河エレクトロニクス、特殊機能電線は、顧客のニーズに合わせて開発する。その内の一つが仏・ITER(国際熱核融合実験炉)向け超電導ケーブルだ。

このケーブルは、古河電工が超電導ケーブル約60トン超をITER向けに納入したもの。ケーブルの素線は、銅・スズ合金



平塚工場

線国時評

岸本 庄八郎



半導体需要の好況が続く (電線業界にとっても好影響)

正に審査される。同社はこれをカイゼンの頭文字をとって「K-1グランプリ」と名付けている。16年度の「K-1グランプリ」で平塚工場は、1位の北陸工場に次ぐ2位に入った。平塚工場は、新製品の燃線・テーパー工程で、線速の向上、準備(段替え)時間短縮、効率的な人員配置などの改善を行い、作業組全体の生産性を30%向上させた。